

Title	風土の変貌
Author(s)	古川, 久雄
Citation	重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて (1996), 16: 1-14
Issue Date	1996-04-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/187553
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

風土の変貌

古川久雄

この報告では、中東と東南アジアの「風土の変貌」という点からの比較を試みる。私が東南アジアで歩いてきたのは、東南アジアでも特に湿潤な世界、つまり泥炭湿地の世界である。木が朽ちてもなくならずに、積み重ねられていく。それが泥炭の土を形成する。大変じめじめしていて猿も入ってこないような場所である。私はこうした場所で仕事をしていた。後に中東を観察する機会を得た。ここは東南アジアとは極端に異なる乾燥の世界であった。大変に驚いた。両者はきわめて対照的である。よってその比較は、容易であろうと私は最初考えていた。しかし実際にその作業を行うとなると、決して簡単ではなかった。ここでは、多少あられずりであることを覚悟して、大雑把に中東と東南アジアを斬ってみたい。

はじめに発生学的風土という視点から考える。中東地域は、ニッチェがきわめて単純である。陸、砂漠、ワジ、ドライステップぐらいしかない。それと、ルートとしての海。東南アジアと違って中東の場合、海はどうも働く場所ではなくて、ルートとしてのみ存在している。

こうした場所では、人間の潜在的エクメネーは限定される。人が住める場所に限りがある。そして、そうした人が住める場所は、ずっと昔にすべて人が住んでしまっている。そこでは人々は、びっちり固まって住んでいる。その村は小さな泥の家が連続的に連なって蜂の巣状にひとかたまりになっている。屋根の上が道である。このような密集集落においては、人々は毎日互いに顔をつきあわせながら生きている。それゆえ人とのつき合いが大変に巧くなる。このつき合いの巧さといった性質を社会的練度と呼ぶことにする。

これは隣人関係に止まらず、戦闘、交易、支配、服従といった社会的関係の処理の必要から、そのための制度、その記録、その為の学問とイモソル式に社会制度を発展させる。そうした装置や制度を一揃い持った都市が新石器時代には現れ、エクメネーはその時に既に一杯になる。増加した人口に対してはディアスポラが必然化される。そして社会的練度の高い地域が拡大してゆく。

一方の東南アジアを発生学的に見ると、ここはきわめてニッチェの豊富なところである。木の生えた島が点々と多数にある。ここにはまず森がある。森といっても様々である。何層にも樹冠の重なる熱帯多雨林がある。そこには、野生のドリアンやマンゴー、サゴなど多様な植生が見られる。またモンスーン林という落葉する少し変わった森もある。山の上のほうや大陸部にはテラテラした葉を付ける照葉樹林がある。そこでは多様な林産物が得られる。次いで海がある。これも、マングローブで縁どられた浅海のドロの海があり、また澄んだ水のサンゴ

礁の海など様々である。このようにニッチェの豊富なところでは、社会的練度はあまり発達しない。こうした地域で発達するのは、生態的練度である。つまり、ここでは人々は、各自が見つけた多様なニッチェにそれぞれ自分自身をすっぽりはめ込んで生活している。きわめて自然に適合した生き方をしている。こうした側面での鍛錬度が生態的練度であって、それが非常に高いのである。

ここで、宗教に関してしてみる。中東世界では、きわめて厳格な人格的一神教が現れる。最初はユダヤ教であった。ユダヤの神は、逆らうと恐ろしい神である。復讐の神である。契約を破ると殺されてしまう。また、ユダヤ人でなければならないという偏狭な面もある。が、契約した人は選民であるとして保護される。「自分の言うことは聞けよ」ということである。ついで同じ系列で、鬼っ子のような形でキリスト教が現れる。これはローマ帝国の出現と深く関わっている。いろいろな人間を組みこんで上手くやっ払いこうという考え方である。あたかも会社を上手く経営していこうというような感じの宗教である。その建物も、ユダヤ教の場合はテント、あるいは遊牧民的な幕屋であったのが、キリスト教の場合、初期には穴蔵であったにせよ、すぐに大きなしっかりとしたものになっていく。しかしながら、キリスト教というのは、先に鬼っ子と言ったように、信仰が神と人間とお化けが合体しているようなややこしい側面を持つ。しばらく後になって、イスラム教が現れる。これはユダヤ教の直系の弟子のような存在である。が、万民、そこに来る人は誰でも歓迎するという異質との共存、あるいは統合といったことを意識している。こうした考え方がイスラーム帝国を可能にし、社会的制度として現れる。

次に発生的風土をつくりあげる基盤としての生業はどうか。中東では住める場所イコール水のあるところである。ドライファーマーミングという乾燥農法が、いわゆる肥沃なる三か月地帯において行われている。そこでは、ある程度の降雨があり、堅い葉っぱを付ける柾の木が点々とあり、その下に草が生えている。しかし、これは麦を「ばらまく」といった程度の農法であり、得られる収量はあまり高くない。ついで発達したのが、私がオアシス農耕牧畜複合と呼ぶところの生業である。カナートで、あるいは谷川から水を引いて灌漑を行う。こうしてオアシスに農業が発生する。この場合の収量は極めて高い。1粒が200粒ぐらいに殖える。そこで人々は、パンと肉と「ナツメヤシ」を食べて生活している。そして人口が増加すると、ディースポラが起こる。

一方の東南アジアでは、まず居住可能な場所は無限にある。人々はあちらこちらへ動くが、その住んだ場所ごとにドリアンやマンゴー、サゴなどの木を植えていく。そうしたものを残す

ことによって、その場所が自分のテリトリーであることを主張する。無限の土地を疎らに開いて印を付けていくのである。他の人はそれを尊重して自分は余所の場所を開く。食料はサゴやイモ、魚などがある。その一方で天然産物をいろいろと集める。家を建てる場合には、たとえば海の近くであれば、ニボンというヤシの木を利用する。あるいはニッパヤシの葉を採り屋根を葺き、ロタンを採って建材を縛る。こうして杭上家屋が作られる。東南アジアの人々は、このように生活していた。

そして、中東のほうでオアシス農耕牧畜複合というのができると、それが穀作拡散という形で世界中に拡がる。その影響を受け、東南アジアでも、イモやサゴ以外に雑穀や米などの穀物が作られるようになる。そうして、水田や焼畑などの新しいニッチェが東南アジアに出現する。印を付けた地帯が拡がっていく。東南アジアの場合の変貌とは、自分の周りの林を切り開いていく形をとる。林は広大であるので村はその中に疎らにあり、更にその中で人々は家族という小さな集団となって疎らに住む。ここでは人工的な制度は発達しない。人々は自然に即して暮らしてきたのだ。中東の場合は、先に触れたように、かつては檜の木のエがチョコチョコとあったかもしれないが、それはきわめて早い時期、つまり新石器農耕の段階で無くなってしまっている。これに対して、東南アジアはコレクターの世界である。コレクターは金目になるモノ、たとえば沈香や竜腦、ロタンなどを集めるのであるから、それがあつた所であれば、林に少し手を加えて切り開く。しかし、そうした産物のない他の場所はそのままである。ゆゑに巨大な林が残されたのである。人口の少ない間はこういう状況だった。しかし、人口が増えてくると開きうる空間が減ってくる。その段階でも人工的規則は働かない。これが現在の東南アジアの森林消失問題に繋がる。

ここで、二つの世界の規範について考えてみる。中東では、密集して暮らしている人々が、毎日ベチャラベチャラと喋って生きている。生業は、完全なる人工空間において行われるオアシス農耕である。このような場所では、人工的制度、つまり契約や約束事などが、きちっと決められる。人々は、それを絶えず練り上げて体系的な規範を作り上げているのである。一方の東南アジアには、そうしたきちとした人工的な規範はない。ここでは、規範は直接的である。つまり、自分たちの周りにある自然を模倣することが、唯一の規範になっているのである。もちろん、東南アジアにも、相当早い段階に西のほうの人工的制度、あるいは人工的空間を作る文化が入ってきたところがある。ジャワや大陸部の平原などがそうである。しかしながら、そうした地域の規範にしても、どうやら自然の模倣に近いと考えられる要素がある。土屋さんによると、ジャワの王と臣下の関係は次のようである。つまり、ジャワでは、王の持つ聖なる力

が、まず王の下臣に伝わり、そしてさらに下の臣下に伝わっていく。こうした連鎖によって権威の正統性も臣下に繋がっていくと考えられているのだという。このような無限の連鎖は、熱帯多雨林の世界との類似で考えれば、まさに自然の連鎖の模倣にはかならないと考えられるのである。

以上が両地域についての私のイメージである。

質疑応答

社会的練度と生態的練度

掛谷 ウェットとドライという点に着目して、中東と東南アジアの両地域を対照させてのお話であった。非常に大きく、中東のイメージを出していただいたと思う。それでは質問、コメントを受けていきたい。

応地 タイトルに変貌という言葉がある。まずこれについてうかがいたい。

古川 中東についていえば、基本的に変貌していないということである。まず住む場所は、7000年前に決められてしまった。そこから溢れた人はディアスポラしていった。ただ、社会的練度とは、社会のあり方と意識の両方にかかっているが、中東はそれを練りあげてきたのである。その過程にユダヤ教、キリスト教、イスラーム教があった。一方、東南アジアの方は、自然をつぶしていくという形で変貌している。居住空間そのものの面的広がりや質的な変化があった。また、都市についていえば、中東にはオアシス都市があるのだが、これとは違う近代都市が東南アジアには入ってきている。

掛谷 古川さんのお話では、社会的練度と生態的練度が重要なキーワードであったと思う。これについて議論してはどうか。

片倉 言葉の意味するところをもう少し説明していただきたい。

古川 社会的練度というのは、ネチネチと人と人がせめあって暮しているためにできあがる社会的性質の高さである。中東はそれが高い。東南アジアでは、人は生態的ニッチにはまり込む形で暮している。この場合は生態的練度が高いのである。

高谷 社会的練度とか、生態的練度といったややこしい言葉ではなく、例えば組織原理という言葉でそれを表わしてはどうか。

立本 まず、社会的練度、生態的練度と風土との関係が分からない。古川さんは、諸事象を並べてはおられたが、その間をつなぐ論を述べられていない。結局今日のお話では、東南アジアと中東はアネクメーネ、周辺の世界であったが、生態的な違いからエクメネー化の違いが両地域に生じた。しかしもともとは同じ、つまりアネクメーネ、周辺的であった

とおっしゃっていたように思う。中東は、中心と周辺をセットにして捉えられていた。一方東南アジアについては、中心を抜きにして周辺だけで捉えられていた。比較の単位の設定の仕方は、それで良いのだろうか。つまり、中心のある文明と中心のない文明とが同じレベルで比較できるのかどうかということである。

古川 東南アジアの場合には、中国、あるいはインドを中心として考えていくことになるかもしれない。

立本 それでは普通の文明論的な説明の仕方に戻ってしまう。

高谷 私はむしろ、中国とかインドよりも、東南アジアの海を重視したい。東南アジアは周辺としかないように捉えられているが、それで良いのだろうか。

古川 私がここで言いたかったのは、イスラームの民に比べると東南アジアは周辺であるということだ。

田中 本当にそれで良いのか。立本さんの誘導尋問に引きずられているようだが。

大塚 中心と周辺という問題設定そのものが妥当なのであろうか。東南アジアにとってどこが中心でなければ、東南アジアは周辺にはなりえない。

立本 それが一番の問題である。

高谷 片倉さんか、家島さんにお聞きしたい。今の古川さんのお話で、中東についてこんな点はまったくの思い違いだ、というところは

なかったであろうか。例えば、イランの高原やトルコまでも一緒に議論すべきではない、あるいはチグリス・ユーフラテスとエジプトを一括して中東にされては困るといったような。

片倉 全体的には、中東をうまく把握されていたように思う。練度とは何であるのかはよく分からなかったが、ここでの議論について言うならば、中心と周辺について話を進めるべきではないと思う。ディスクリプティブに話していただいた部分に焦点をあてて議論したほうが良い。

家島 中東と一口に言っても多様な自然生態系をもっており、すべてを一括して議論することはできない。また、中東は三大陸の接点、地中海とインド洋の二つの海域世界の交わる位置にあって、四方から多様な民族・文化が絶えず流入・衝突・融合を繰り返してきた、極めて社会・経済・文化のモビリティに富んだ場所であると言える。

高谷 私は古川さんの話は感覚的には良く分かる。トルコの街に一緒に居た時に、古川さんが突然ギャーッと叫んだことがあった。「窒息しそうや!」「もう死にそうや!」と叫んだ。古川さんが言った社会的練度の高さは、その時の圧力であろうと思う。彼は檻にとじこめられた動物のような気持ちになったのだ。東南アジアでは、どれだけ長くいてもそういう気持ちにはならない。私は、ギャーッと叫んだ人は、これまでに二人しか知らない。

一人は古川さんで、もう一人はヒマラヤの山に一緒に行ったある若者。雨季のヒマラヤにはヒルがたくさんいるのだが、その人は何百というヒルに足に登られてきて、ギャーッと言った。ヒルの練度を感じたのだ。

片倉 トルコの街にしても、ヒルにしてもそれは慣れの問題なのではないか。

鈴木 今の社会的練度というのは、横への広がりと言い換えられるのではないだろうか。東南アジアでは住みやすい場所があればそこに住み込んでしまう。しかもその住みやすい場所とは、エビがとれるとか、ナマズがとれるとか、様々に異なっている。これが生態的練度であろう。この練度は非常に特化しており、タコツボ的である。これは横に広がりにくい。中東の方は、ネットワークが形成されて、中心がいくつかできている。そのため、タコツボにはならず、横に広がって他を抑えるような練度が発達する。それが社会的練度であり、横への広がりを持っているのである。動きやすい所を横に広がるのと、住みやすい所に落ち着くという違いがある。住みやすい所に落ち着いて、それぞれが精緻な世界を作っているのが東南アジアと言えるのではないか。荒っぽいが波になって、横に広がっていくのが中東と言える。そこではネットワークが作られるのである。

古川 東南アジアについてはそうだ。カリマンタンの例を挙げると、海沿いのマングローブを開いて野菜畑を作っていた。そこには、

上流の人々が苗を売りに来るのである。しかし、やがてその開いた場所には泥がたまって、排水ができなくなる。そうすると野菜畑の人々は、生業を変える。干潟の魚とりになったりする。

高谷 鈴木さんがおっしゃったような難しいことではなくて、中東には賢い人間が多い、ということ指して社会的練度が高いといっているのだと思うが。

古川 そうだ。

応地 提案と質問をしたい。社会的練度については家島さんのご報告の後に議論したほうが良いと思う。そこでは、鈴木さんが今おっしゃったようなネットワークの問題も扱うことができる。ここでは、他の、例えば風土について議論を進めるほうが良いのではないだろうか。これが提案である。質問は、中東は人工的空間であって、潜在的エクメネーが小さいということだが、そこでディアスポラが起こる、その必然性について、風土的にはどのように考えるべきなのだろうか、ということである。

古川 結局、社会的練度の広がりであろうか。

立本 この話はやはり後にしたほうが良いだろう。

中東の移動、東南アジアの移動

掛谷 だいたいこれまでの話では、自然的、エコロジカル、あるいは風土的な背景によって中東を考えることができるのかどうか

大きな問題であっただろう。古川さんは東南アジアでは、風土と社会的なものとのつながりを考えてこられたのであるが、中東のほうは、そもそも風土的なものを議論に乗せていくことができるのかどうかという問題がある。単純に言えば、中東では人間が住める場所は非常に限られていて、そこにほぼ全ての人が集中している。そして、社会的練度が生じる。そこでは、当然のことながら人口が増大すれば、人々はどこか別の場所に移っていかざるをえない。そしてディアスポラしていく。それが古川さんのイメージであると思うが。

坪内 ディアスポラというのは中東から外に向けてのことなのか。

古川 必ずしもそうではない。中東内部での場合もあるだろう。ただし、いずれにせよ、そのディアスポラしていく先は、生態的なニッチであるよりも、社会的ニッチであることが多いと思う。

立本 ディアスポラという視点で言えば、東南アジアのほうでもそれが頻繁に生じているという点では同じではないか。クアラ(川口)などを移っていくようなディアスポラがある。むしろ中東のほうが、ディアスポラするにしても人間が開いた先にしか動かない。その意味では非常にディアスポラが限定されている。しかし東南アジアの方は、ディアスポラしていく先が無限にある。

片倉 古川さんがおっしゃったのは、次のようなことではないか。つまり、東南アジアで

は人は動いていくが、住みやすい場所を見つけたら、そこでずっと住み続けていける。一方、中東の方では、住みやすい場所を見つけても——もちろん中東にも動かずにじっとしている人はいるのだが——そこに住み続けることは少ない、あるいは難しい、ということである。

小杉 古川さんに質問したい。近現代に入ってからの人々の移動は別として、東南アジアでは、かつて人々が自然に接して暮していた頃には、人は移動しなかったのか。

古川 移動はしていた。しかし、いずれにしてもそれは、自然空間でのことである。中東での人の移動は、人工空間でのことだと思う。

小杉 人工的制度と規範の話で、自然の模倣ということを経済学についておっしゃっている。しかし、風土が規定するというのであれば、中東にあるのも人工的制度なのではなく、中東的風土での自然の模倣であるとも考えられる。例えば、中東にある石の家などは、石の世界という風土ゆえなのである。竹や木は自然に近くて、石は遠い、というのは納得できない。泥の家などは、私にとっては非常にナチュラルに思われるのである。私は砂漠という環境ゆえに一神教のイスラームが生まれたという考え方には与しないが、東南アジアにあるようなアニミズムだから自然に近くて、イスラームだから自然から遠いということはないと思う。それぞれの自然、あるいは風土に応じた世界観があるとする、

一方がより自然的で、他方がより人工的である、という見方は妥当ではない。風土そのものが規定しているのだと考えたほうが良いのではないか。

古川 今の小杉さんの意見には賛成である。しかしそうすると、どこでも同じになってしまうので、あえて差異を強調して対比したのである。おっしゃったように、風土というのは自然と人間の相互作用で作られるものであるから、自然の模倣は中東についてもあてはまるであろう。しかしそれはベースの話で、人間の生きざま、考え方等を総体的にみた場合には、やはり東南アジアのほうがより自然模倣的であるように思われる。

小杉 その意味で社会的練度、あるいは生態的練度とおっしゃるのは分かる。しかしそれが、高いとか低いとか言うのであれば、中東にも東南アジアにも両方の練度があることになる。

古川 私は、それぞれの練度の深さ、影響力について述べたのである。

応地 古川さんのお話では、ニッチェには単純なものと多様なものがあることが前提になっている。よって、自然の模倣でも、中東のそれは単純であって、東南アジアのそれは多様である、とういことであろう。

掛谷 今の、ニッチェが単純、多様というのは、住む場所、生業などが中東では限られているが、東南アジアには多数の選択肢があるという意味だと思う。中東のニッチェが単純

ということについて、中東研究者の側から意見をうかがいたい。

大塚 東南アジアのことは知らないが、中東についてはあてはまると思う。中東の人々を生業で分けると、主に、都市民、遊牧民、海洋民、農耕民になる。私は農耕民について研究している。古川さんのスライドで、チグリス・ユーフラテスとイランの農耕があったが、あれは北アフリカ、ナイル流域の農耕とほとんど同じである。農耕という点では、乾燥地帯である中東ではかなり共通している。都市的な生活、遊牧生活、そして——地理的には限定されるが——海洋民の生活についても同様に、あれだけ広い中東であっても共通性が見出せるように思う。一方の東南アジアでは、同じ農耕であっても、大陸部と島嶼部、あるいは山地と平野部で多様な形がある。このように生業で見ると、今のニッチェのお話はかなり当たっているように思う。

掛谷 中東はドライな地域であり、チグリス・ユーフラテスは大きなオアシスと考える。砂漠の中にオアシスがあるという自然景観的構図が、古川さんの基本的な視点であろうか。

古川 そうだ。

掛谷 都市についてはどうか。

古川 都市についても同じであろう。つまり、村にしても、オアシス都市にしても、肥沃な三日月地帯の都市にしても基本的には同じであると思う。オアシス都市として、発生学的に同じ構造であろう。ただ、施設の面では

いろいろ付け加えられている。その付け加えられているものが、中東の場合は人間の賢い頭で考え出されたものであると考えている。

掛谷 古川さんは、生業について、オアシス農耕牧畜複合とおっしゃったが、中東の重要な生業として遊牧がある。その遊牧の世界は、あまり話に取り込んでおられないように思うが。

古川 遊牧についてはあまり知らないので、触れられなかった。

鈴木 砂漠や乾燥ステップを海にみたとて、東南アジアの海の世界と比較してみてもどうか。東南アジアの漁撈民と、動きまわるという点で似ているところがあると思う。陸に島があるというように、中東を見ると分かりやすい。

応地 中東のニッチェについて言うと、人工的ではあるが、オアシス、カナートによる灌漑の農耕、あるいは牧畜、遊牧等々、多様性はあると思う。東南アジアについては、木一本を識別できるレベルでニッチェを語り、中東については飛行機から眺めるレベルでニッチェを語っているようにも思うが。

水不足と移動

小杉 先のディアスポラの話に戻りたい。中東の民族構成が語られる際に、アラビア半島の人口圧力によって移動が起こり、人々は押し出された、と一般的にいわれる。私は、なぜアラビア半島のような人が住めない広大な

土地で、どうして人口過剰が起こるのか疑問に思っていた。今日の古川さんのお話の中に、この疑問に対するうまい説明があったように思う。つまり、アラビア半島では、人が住める限界のレベルが非常に低い。そうした場所での人口過剰であり、それゆえすぐに移動を引き起こす圧力になるのである。この点については分かる。ただ、砂漠の中で水があるからチグリス・ユーフラテスもナイルもオアシスであると言うことは出来るが、チグリス・ユーフラテスやナイルの流域、ダマスカス周辺のように巨大で吸収力のあるオアシスと、少し人口が増加するとすぐに臨界点に達し、ディアスポラ化してしまうようなオアシスとは区別する必要があると思う。チグリス・ユーフラテス流域やナイル峡谷から外に人が出ていったという話は、あまり聞かない。機能や規模からオアシスをいくつかの種類化する必要がある。

家島 水があったから人が集まったというよりは、むしろ交通、あるいはネットワークの条件から考えて便利な場所に、人工的な居住空間を作った、と観るほうがよい。その空間の周辺に水をひくためのカナートを作ったり、地下水を人工的に利用できるようにし、さらにその場所の安全を守り、農耕地を作った。つまり都市が先に形成されて、その後に農耕地が広がるようなケースがあるのである。東南アジアの場合も、ジャングルを切り開いて人工的空間に人が住む。こうしてみると、中

東と東南アジアの両者は似ている。また、アラビア半島のなかでも多くの人口がいるのはイエメン山岳部、ハドラマウトのワーディー、オマーン山岳部などの限られた地域であり、そこには農耕地が広がり、その周囲には砂漠がある。交通ネットワークの拠点としての都市は、人口稠密の場所であった。都市は、いずれも厳しい自然に囲まれ、また遊牧民からの圧力もあった。都市の人間は、元来、移動性が高い。様々な移動性をもった社会・自然環境のなかで、人間移動が起こった、と考えられる。

大塚 生態的な条件を考えるならば、中東は砂漠であるよりも、乾燥地帯である。乾燥地帯で生きていくためには、水の確保が非常に重要である。そこで、水を手に入れるためのいくつかの方法がある。一つは天水である。また、オアシスがある。そしてカナートのように水をひいてくる方法がある。また、大河を利用した灌漑も行われている。そうした類型化はできる。また、水があるから農耕が行われる場合と、農耕のために水をひいてくる場合というように分けることも出来る。

古川 いずれにしても、東南アジアではカナートのように人間の賢さで水を運んでくるようなことはない。

鈴木 また乾燥地帯では、季節ごとに水のあふる所に、人間が食糧のもとでもある家畜をつれて移動してしまうような遊牧生活の形態もある。水の使い方のもう一つの類型として、

人間が動いていく形がある。

片倉 水の使い方では分けられない部分が多い。アラビア半島の先端部分で、古来より「幸せなるアラビア」とよばれたイエメンやハドラマウトのような農耕の可能な土地が人口扶養の限界に達し、食べていくことが出来なくなった人々が、遊牧民の起源と考えられている。その人々が農耕不可能な土地に北上していき、遊牧民化したのである。まさに初期のディアスポラであった。そうした人々のうち、ある者はカナートを作り、水をひいて農耕を行い、ある者は遊牧を続け、あるいは両方を同時に行なった。中東では、このようにして人々が広がっていったのだと考えられる。

高谷 そうすると、先に古川さんがおっしゃっていた、中東におけるディアスポラの実体が少し判りやすくなる。農耕地で溢れた人が遊牧に移行して、急激に広がっていく。坪内 都市的な生活、あるいはオアシス的な生活は価値が高いと考えられているのだとすると、遊牧の生活はどうであろうか。価値は低いと考えられているのであろうか。

片倉 時代によって異なるが、大雑把に言うところ、遊牧の人々は農耕を見下しているところがある。ただ近代に入ってから、余剰蓄積が可能な農耕民のほうが逆に遊牧民を見下している場合もある。が、全体的、あるいは歴史的にみると遊牧生活の価値は非常に高いと考えられている。遊牧民の家系であることを誇っているような場合もある。

中東のキャリング・キャパシティー

高谷 一つ確認したいことがある。小杉さんは、先にチグリス・ユーフラテスやナイルからは、人口過剰ゆえに人が出ていったという話は聞かないとおっしゃった。中東は乾燥のためにキャリング・キャパシティーが小さく、昔から人は外に出ていっていたと思っていたのだが違うのか。チグリス・ユーフラテスやナイルなどは、ずっと人間を収容しつづけてきたのか。中東は水がなく、住む場所はすぐ人でいっぱいになってしまうから、中東の人々は自分の場所でずる賢く生きるか、あるいは外に出てうまく生きていかざるをえない、というのが私や古川さんのイメージなのである。東南アジアではキャリング・キャパシティーは圧倒的に大きい。ただ、そこでは人はマラリアなどの病気で死んでしまう。しかしとにかく、人々は悠々と生きてきた。ところが、中東の方は、人がいっぱいいるため賢く生きていかなければならない。これが私の大雑把なイメージなのであるが。

大塚 近代になってからの人口圧は別として、それ以前についていえば、中東における人口圧の高まりはやはり歴史的な結果である。もともとは東南アジアに比べるとキャリング・キャパシティーは、はるかに小さかったと思う。

家島 他にも様々な条件を考える必要がある。例えば、自然条件の急激な変化、コレラやペストなどの疫病によっても人が住めなく

なる。小杉さんがおっしゃったチグリス・ユーフラテスやナイルなどでも、自然条件の変化、他民族の移動、征服などの理由で、人は外の世界に出ていかざるを得ない。

高谷 そういった点も含めて考えて、やはり中東は人が外に出ていかねばならなかった地域である、ということにしてもよいのだろうか。

片倉 チグリス・ユーフラテスやナイルなどでの都市計画の手伝いをした折に、そこにはいくら水が多くあるようにみえても、キャリング・キャパシティーは決して高くはないと思った。飛行機から、ナイルを見ても、砂漠の中にヘビのようにほっそりとナイル川が流れていて、その縁にフリルのように緑があるだけである。その中に入ってしまうとよくわからないが、緑の部分は決して大きくない。比較的にいえば緑の多い地域の人々もけっこう外へ動いている。エジプト人はナイル河畔に生活を密着させ、最も移動しないと考えられていたのだが、実は動いている。現在においてはもちろんであるが、初期においてもそうであった。例えばキリスト教をアイルランドに伝えたのは、ナイル河畔から移動していったエジプト人なのである。

高谷 やはり食べることが出来なくなって、出ていったのだろうか。平均降水量でみると、中東でも人が生きていくのには問題がないように思われる所もある。しかし、そんな所でも五年に一度干ばつが起こる。すると、その

時は住むことが出来ない。そういった不安定さを含めてのキャリング・キャパシティーを考えると、中東というのはやはり人が外に押し出されざるをえない地域なのであろうか。あるいは、そうではなくてステイブルな場所も多くあるのだろうか。

片倉 人は、必ずしも食えることが出来ないという理由だけで、外に出ていくわけではないと思うのだが。

高谷 商売などで外に出ていくケースについては、後に論じたい。ここではとにかく、人が食べていくことが出来るか、あるいは出来ないかという点、すなわちキャリング・キャパシティーについて考えたい。

掛谷 ようするに、人口支持力、食べていけるというベースの点からみて、中東のキャリング・キャパシティーは低いと考えてよいのかどうかということであろう。

高谷 そうだ。

19世紀まで続いた古代的農業

鈴木 中東では人が広がっていったのは、かなり初期のことである。つまり早い時代に関が進展でしまい、キャリング・キャパシティーは低くなっている。しかし、全体としての収容量は、初期の時代には相当大きかったとみる事が出来る。東南アジアの場合は、初期の人口数が非常に少なく、しかも森を人間が支配することは出来ないで、収容量も小さかったのではないだろうか。砂漠と同

じように、森の中では人間の住める場所是非常に限られていて、その限られた場所を動く中で生態的練度が高まった。確かに東南アジアのほうを選択肢は多様であっただろうが、食べていけるかどうかという点についていえば、中東でも東南アジアでも同じだったのではないか。

高谷 早い時代に開発が進んだとおっしゃったが、それはいつ頃の時代のことか。

鈴木 オリエント時代、あるいはそれ以前のことであろう。7000年から3000年前ぐらいにはかなり開発が進んでいた。

高谷 その時代にはもうすでに人で一杯だったと考えてよいのだろうか。

鈴木 その当時の技術水準では、そうであったろう。

高谷 技術水準とは農業についてのことか。

片倉 いわゆる農業技術の革新はずっと後になってからのことである。19世紀になってからで、その結果、遊牧が相対的に重要性を失した。

鈴木 中東では中国のような農業技術の段階的な発展はなかった。早い時期にある程度発達してしまっており、それ以後の前近代には発展はあまりなかった。トルコについていえば、おそらくローマ時代とオスマン朝時代では、人口規模はそれほど差がなかったと思われる。

大塚 ナイルの場合について、今世紀になってディーゼルポンプが農業に本格的に使われはじめるようになってからの時期を除いて考

えると、それ以前の一つの農業技術の革新は、牛を使った水車である。それは、少なくとも、プトレマイオス朝の時代にすでに使われていた。つまり、近代を別にすると農業技術は、2000年以上前にすでに発達し終えた段階にあった。

再び社会的稜度と生態的稜度

高谷 そうすると、その2000年前の革新以降は、農業技術の面では特に変化せず、やはり人口が増大すると人は外に出ていったということになるだろうか。

小杉 飢饉といっても、それは一度に中東全域でおこるわけではない。ある場所で食べていけなくなっても、他の場所に吸収力がある。中東全体のキャリング・キャパシティーが低いために、人は全て出ていくのではないと思う。先に鈴木さんが、砂漠を海にみだててみてはどうかとおっしゃった。そうすると、チグリス・ユーフラテス流域やナイル峡谷、他にもシリア、トルコ、チュニジア、モロッコなどの地域は巨大な島になる。その巨大な島の間に小さな島としての人が住める場所が点々とある。大雑把に言うと、石油が出るのはそうした小さな島、つまり、リビアやアルジェリア、あるいはアラビア半島の周辺である。巨大な島では石油は出ない。イランは巨大な島になるかもしれないが、石油が出るのは周縁部だけである。トルコの場合は、砂漠という海が終わって大陸が始まっているよう

な感じである。

鈴木 トルコは中東で一番緑が多く、まさに大陸の観がある。

高谷 それではトルコと高い山が多く緑の多いイランを除いて、砂漠とオアシスだけで考えるならば、古川さんや私が考えているようなイメージで良いのであろうか。

立本 これまでの話は、キャリング・キャパシティーについての論議である。端的に言うと、キャリング・キャパシティーと生態とは直接的に関係しているのか、が議論の鍵だと思う。キャリング・キャパシティーとは、人口が増加すればそれに応じて人間が作っていくものではないか。誰もキャリング・キャパシティーを決めることは出来ない。ある場所での人口の実態はこうであった、だからキャリング・キャパシティーはこれだけである、と言うことしか出来ない。その中でどのように生態を絡めて話を進めていくのかが問題であろう。

片倉 中東では、人々はカナートを掘って、水を引き入れて暮らしていたり、水があってもナイル河畔などでは、洪水に脅えながら暮らしている。大雑把に言えば、キャリング・キャパシティーは小さいといえるだろう。

応地 先に農耕技術の話で、それは数千年前に開発のピークがあって、それ以後はあまり変化はなかった、とおっしゃっていた。これについては疑問がある。例えば、バグダッドではアッバース朝の頃には、インド系の技術が伝わり、二期作に移行した。東南アジアで

はその頃インディカ米が入りインド化が始まっている。そういった意味では、数千年前に過剰開発が終わっていたとは言えないと思う。

高谷 古川さんがおっしゃっていたのはまさにそういうことだと思う。アッバース朝期にあったインド系の技術の導入や近代になってからの揚水ポンプなどの導入、それをも一つの要素として社会的練度といているということであろう。

田中 社会的練度や生態的練度のような、少し曖昧な言葉を使っているために議論が錯綜しているのだと思う。生態、あるいは自然に対する人間の働きかけ、または風土を形成する人間と自然のダイナミズムという点について考えるのであれば、東南アジアで私達が使ったような、農学的適応や工学的適応のような言葉を考えてはどうか。風土は自然に対する人の働きかけの全てであると考えれば、中東や東南アジアでの自然に対する人間の働きかけのパターン、あるいは性格の特徴を端的に表わすことが出来るような言葉を考える必要があろう。

立本 田中さんが今おっしゃったのは、古川さんの話の規範の部分に関してのことである。古川さんが考えておられる人工的制御とは、工学的という意味であろうし、自然の模倣というのはあまり妥当ではないが、自然共生的という意味であろう。しかし、古川さんは社会

的練度という言葉で、何かもう一つ別のレベルのことを考えているのではないだろうか。確かに、私も古川さんのお話で、農学的適応や工学的適応ということを思い浮かべたのであるが、それだけでは社会的練度、生態的練度とおっしゃっていることと重ならないように思う。

田中 今私が述べたことの論点は、大塚さんが水の利用の仕方では区分されたように、中東にも農学的適応の側面があり、東南アジアにも工学的適応の側面がある。しかし、総体として比べた時に、両地域がイメージできるようなそれぞれの特徴を端的に表わす適当な言葉がないだろうか、ということである。

応地 適応の定性的な違いの問題もあるが、古川さんと高谷さんのお話で主張しようとしているもう一つの問題に、適応の結果生み出される人間的、あるいは精神的な面での集積ということがある。その集積の密度の、東南アジアと中東との差異を問題にしようとしているのではないだろうか。それに練度を結び付けて考えようとしているように思われた。

掛谷 社会的練度と生態的練度という言葉は、曖昧であるという難点がありながらも、ここでの議論では何となく気になる言葉であった。これについての議論は、後の家島さんのネットワークと都市論のお話につながっていくと思う。